

副詞「そろそろ」の史的変遷

川瀬, 卓
九州大学大学院人文科学府 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/26939>

出版情報 : 語文研究. 112, pp.1-16, 2011-12-26. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

副詞「そろそろ」の史的変遷

川 瀬 卓

1. はじめに

現代語における副詞「そろそろ」は、次のように、時間に関わる副詞としてよく用いられる。^(注1)

(1) a. そろそろ夫が帰ってくるころです。(飛田・浅田 2002)

b. (会議) 皆さんおそろいのようですから、そろそろ始めますか。(飛田・浅田 2002)

c. 春先から頑張ったのでそろそろ疲れが出てきた。(飛田・浅田 2002)

これらは、発話時から見て、ある事態の発生する時間がせまってきたことを表しており、現代語での主要な用法である。

現代語の「そろそろ」には、もう一つ用法がある。動作が静かに、ゆっくりと行われているさまを表す用法である。

(2) a. 音を立てないようにそろそろと歩いた。

b. 襖をそろそろと開けて部屋をのぞきこむ。(飛田・浅田 2002)

共起する述語に注目すると、(2)の用法はある特定の動きの様態を述べており、(1)の用法に比べて語彙的な制限がある。たとえば、動作性の動詞という共起制限があり、名詞を修飾することはない。一方、(1)の用法は、動きの様態を表すのではなく、事態の発生を時間的に位置づけるものなので、(1a)のように時間を表す名詞とも共起することができる。

このように、現代語の「そろそろ」は、動きの様態を表すものと、事態の時間的な側面に関わるものに整理できるが、二つの用法は意味機能的にかなり異なるものであるといえる。これらの用法はいったいどのような関係として捉えればよいのだろうか。

試みに中世の抄物資料に目を向けてみると、(3)のように動きの様態を表しているものはあるが、事態の発生を時間的に位置づけるものは見られないようである。

(3) アヲ―トアル田ガアリテ水ガソロ―ト流ル、也(中華若木詩抄、卷上・11オ)

このことからすると、現代語に見られる二つの用法のうち、事態の発生を時間的に位置づける用法は、歴史的変化の結果生じたものと考えられる。したがって、「そろそろ」の用法の関係を明らかにするには、歴史的な観点から考察する必要がある。

「そろそろ」の現代語における用法に関しては、擬声語・擬態語辞典を代表として、さまざまな辞典類でとりあげられており、ある程度の記述がある。たとえば、森田（1989）では、「動作性の動詞に係って、その行為のスピードが極めてゆっくりであること」を表すもの（(2)の用法）と「話し手の身を置く現時点が、基準とする話題の事柄の時点に次第に近づいてきていること」を表すもの（(1)の用法）の二つがあることが指摘されている。しかし、「そろそろ」の歴史についてくわしく考察した先行研究はないようである。

以上のような状況をふまえて、本稿では「そろそろ」がどのような歴史的変化をとげたのかについて考察したい。その際、共起する述語の語彙的特徴、文法的特徴および文脈などから意味用法を探っていく。まず、2節で中世における「そろそろ」の用法を確認し、3節で近世における「そろそろ」の変化を見た後に、4節で「そろそろ」の用法派生の要因について考察する。5節では近代以降における「そろそろ」の用法の勢力交替について述べる。最後に、6節で本稿の考察をまとめる。

2. 動きの様態を表す「そろそろ」

まず、動きの様態を表す「そろそろ」をみていく。資料に関しては、稿末の「調査資料および使用テキスト」を参照されたい。

「そろそろ」は中古にはなく、中世にはいって用いられるようになるようである。名語記には次のようなものが見られる。

- (4) 虫ヤクチナハナトノソロ〜トハフ ソロ如何 ソ、ラヨノ反（名語記、巻4・62ウ）

虫や蛇が這う様子に対して、「そろそろと」で表されており、動きが静かなさまについて用いられていたようである。

また、抄物資料にも、動きが静かなさまを表している例が見られる。抄物資料に見られる用例は、現代語と異なって意志的な動作ではないものとの共起が多く見られる点が特徴的である。

- (5) a. 無憂樹ノ花カナンソヲトラウトテ右手ヲ奉タレハ脇ノ下カラソロ〜ト流出タソ（百丈清規抄、巻1・53ウ）

- b. 秋ノ初落葉カ雨ノフル様ニソロ〜ト落ソ (山谷抄、巻1・84オ)
- c. 又春ノ時分餘寒去テ花ナンドノ開クルニ春雨ノソロ〜トフルニ楼へ上テ遠目ヲ放ツハ詩人ノ心ニカナウタト云心カ (中華若木詩抄、巻上・15ウ)
- d. 其時分ニ小風ソロ〜ト吹テ水上モチラ〜トシテ魚ノイロコノヤウナ細浪カ生スルソ (四河入海、巻1の2・76オ)
- e. カウスレハソロ〜トヒトリシツカニ江ノ景ヲナガメテアルイタ体ニナルソ (中興禪林風月集抄、10オ)

これらの例は、主に音が静かであるという側面から様態を表していたのではないかと推測される。たとえば、(5c)では雨が降る様子が静かであると解釈でき、(5d)では風が吹く様子が静かであると解釈できる。

キリシタン資料においても、事態の発生を時間的に位置づける用法は見当たらず、動きの様態に対して用いられているようである。たとえば、ロドリゲスの『日本大文典』やエソポのハブラスに、次のような例が見られる。

- (6) a. Sorosoro (そろそろ)。徐々に。Xidzucani, Sorosoroto ayumu, vtçu, cū (静かに、そろそろと歩む、打つ、食ふ)、等。(ロドリゲス『日本大文典』: 418)
- b. 蛇寝入ってゐた所へそろそろ (foroforo) 這ひ寄って、(エソポのハブラス 1593、蟹と蛇の事)

また、狂言資料でも、次のような例が見られる。^(注2)

- (7) a. なぜにそろ〜とせいで、きつうおしつくるぞ (虎明本狂言 1642、くび引)
- b. 手かけのかたへは、おがふで、そろ〜と足を入、(虎明本狂言 1642、どん太郎)

以上のように、擬声語・擬態語である「そろそろ」は、動きが静かな様子、あるいはゆるやかな様子を表していたと考えられる。なお、抄物において「(雨が)降る」「(風が)吹く」のように無意志的な動詞を修飾していることは、「そろそろ」の原義が意志的な動作をゆるやかに行おうとする様子を表現するのではなく、音の側面に注目して、主に自然現象的な出来事が静かに生じている様子を表現するものであったのではないかということを思わせる。ただし、実際に生じる音を音象徴的に表現する狭義の擬声語と、音が生じないものを音象徴的に見なして表現する擬態語の境界は明確に分けられるのではなく、それらは連続しうる。したがって、静かであると同時に、動きがゆるやかな様子を表

しているようにも捉えられやすい。その結果、意志的な動作をゆるやかに行うことも表すようになっていったと考えられる。いずれにしても、中世における「そろそろ」は、擬声語・擬態語として音象徴的に動きの様態を表しているといえる。

3. 近世における「そろそろ」の変遷

3.1. 「と」の脱落

近世は、形態的な面でも意味機能的な面でも「そろそろ」の変化が見られる時期である。まず、「そろそろ」の形態面では、語尾に「と」がある場合と「と」が脱落している場合とがあることが注目される。副詞語尾の「と」の脱落に関しては、川瀬（2006）で、擬声語・擬態語の副詞語尾の「と」が、近世を通じて次第に必須なものから任意なものとなっていくことを示した。その中でも、「そろそろ」は他の擬声語・擬態語とくらべて、「と」が脱落しやすい傾向がある。

たとえば、擬声語・擬態語全体としては、近世後期にいたっても、上方語、江戸語ともに「と」の脱落率は50%程度であるのに対し、「そろそろ」の場合、近世前期上方語ですでに54例中37例（68.5%）、「と」が脱落している。さらに、近世後期上方語では69例中52例（75.4%）、近世後期江戸語では97例中70例（72.2%）、「と」が脱落するようになっている。

現代語において、動きの様態を表す用法では「と」がついた形で多く用いられ、事態の発生が近いことを表す用法においては「と」が脱落した形でしか用いられないことを考えると、「そろそろ」において「と」が脱落しやすかったことは注目される現象といえよう。

3.2. 変化の進展を表す用法

「そろそろ」の意味用法を見てみると、近世においても、多く見られるのは動きの様態を表す「そろそろ」である。たとえば、次のような例があげられる。

- (8) a. そろ〜さぐりける所へ、まだらのねこきたる。(わらいくさ 1656、卷上)
- b. ながじり成人竹齋所へ来りて、きゝたくもなきはなしを、うしのよだれのごとく、ひた物なか〜しくはなされける。竹齋もせいつきて、そろ〜といねぶられける。(竹齋はなし 1672、卷下)
- c. ア、一昨日の煤掃にたん肩がつかへた。そろ〜揉んでたもらぬ

か。(重井筒 1707、巻中)

- d. 人囃犬、彼人の後よりそろへ来て、足のこぶらに囃付ければ、(軽口浮瓢単 1751、巻3)

これらは、さまざまな動きについて、それが静かな様子で、あるいはゆっくりとした様子であることを表している。

ここで注目したいのは、動きの様態の修飾だけではなく、状態の変化について修飾するような例も見られることである。次に示すのは上方語資料の例である。

- (9) a. そのいとくにか、てまへそろへふうきになり、大分の身だいになりければ、(宇喜蔵主古今咄揃 1678、巻5)
b. なにが墨にてそめたる花の事なれば、水をかくるとそろへしろくなる。(当世軽口咄揃 1679、巻4)

これらの用法は現代語の感覚からいくと違和感を覚える例である。述語は「なる」という変化を表すものであり、「そろそろ」は変化が少しずつ進展していきさまを修飾している。これらの例は、状態変化の進展をあらわしているという点で、さきほどの(8)とは異なるものとなっている。また、現代語で多く用いられる、ある事態が成立する時間が近づいていることを表すものとも異なる。

同様の例は、次のように江戸語資料にも見られ、地域的な異なりがあるというわけではなさそうである。

- (10) a. 亭主斗りふとんを着てねて居るゆへ、そつとひつぱいで着て、そろへとあたゝかに成て、とろへとねたとおもつたら、(落嘶大御世話 1780)
b. いろへはなしかけられ、三目ハそろへ不気味になり、脇を向ひて何かするを見れば、(富貴樽 1792)

以上のように、近世における「そろそろ」は、意味的に修飾できる範囲がかなり広いことがうかがえる。現代語と違って、動きの様態が静かでゆるやかな様子だけでなく、変化の進展も表わせたということがわかる。^(注3)

3.3. 事態発生が近いことを表す用法

これまで、事態の内的なあり方(動きの様態、変化の進展)と関わる「そろそろ」について述べてきた。近世後期になると、事態そのものを時間の流れに位置づけて、ある事態の発生時に近づいていることを表していると解釈できる

用例が散見されるようになる。たとえば、次のように意志や勧誘を表すものなどは、そのように解釈しやすい。^(注4)

- (11) a. お六「モウ七つ過ぎサ。そろ――明りの仕度をしよふの。」(お染久松色読販 1813)
- b. ドリヤそろ――支度して参ませう。跡月参らねへから色が待て居るだらう(浮世床 1813-1814、初編・巻上)
- c. モウ三年もたつたから、そろ――下山して女房でももちませうと思ひ、(落しばなし 1850)

これらの例は、ある行為をするべき時期であることを、その判断根拠とともに示している例である。(11a)の例では、「モウ七つ過ぎ」だから、明りの支度をする必要がある、と述べている。(11b)では、先月お参りをしていないので、亡くなった妻が待っているだろうから、支度してお寺参りへ行く時期だということ述べている。また(11c)では、「モウ三年もたつた」ので、山を下りて女房をもつ時期だということ述べている。いずれの例も、「そろそろ」はある事態が発生する時間が近づいていることを表している。

意志や勧誘とともに現われているのは、これらが未実現の事態の実現を目指すものであるからであろう。ある事態が発生する時間が近づいているということは、事態の成立がテンス的には未来であるということである。したがって、それとなじむ述べ方であればよいので、次の例のように意志や勧誘の表現でない場合もある。

- (12) 由「ナニモウはやくはねへヨ。みんながそろ――出かけるそうだ。(春色梅兎誉美 1832-1833、三編・巻9)

時間の流れに位置づける副詞として成立したことを示す例としては、次のように述語が名詞述語であるものをあげることができる。近世期においては、調査した範囲では(13)にあげる2例が見られた。

- (13) a. 神主「何にしろ、もふそろ――山も梅の咲時分だが、峠に雪があるせへか、滅法に寒いではないか。」(小袖曾我薊色縫 1859)
- b. 白蓮「先生、モウそろ――花の世界でござりますな。」(小袖曾我薊色縫 1859)

(13a)は梅の咲く時期が近くなったということ述べており、(13b)は俳句の季節に花が多くなる春の季節が近くなったということ述べている。

様態を表す副詞であれば、名詞述語を修飾することはできない。様態を表す副詞は、述語によって表されている動きのありようをくわしくするものであ

り、修飾するのは動きを表す述語でなければならない。しかし、事態発生を時間的に位置づけるものであれば、そのような共起制限はなくなる。そのため、名詞述語とも共起するようになったと考えられる。ただし、述語となる名詞が新しく発生する事態を表すものでなければならない点は注意を要する。現代語でいうと、「彼もそろそろ大人だね」は言えるが、「彼もそろそろ人間だね」は、これまで人間でないものが人間になるという状況が考えにくい^(注5)ため、不自然な文となる。

これまで見てきた「そろそろ」の用法の派生についてまとめると、「そろそろ」は動きが静かでゆるやかなさまであることを表していたが、変化が少しずつ進展することも表わせるようになり、そして、事態の発生が近いことを表す用法を獲得するにいたった、ということになる。

この用法派生の過程を擬声語・擬態語の変化という観点から捉えなおすと、擬声語・擬態語らしさの消失の過程と見ることができる。2節で述べたように、動きの様態を表しているものは音象徴的である。一方、変化の進展を表すものは音象徴性が薄れ、事態発生を時間的に位置づけるものにいたっては音象徴性を完全に消失している。壽岳（1956）によって早くに指摘されているように、擬声語・擬態語らしさの消失は擬声語・擬態語の変化における一般的な傾向であり、「そろそろ」もその事例の一つであるということになる。次節では、擬声語・擬態語らしさの消失という一般的な傾向からさらにふみこんで、どのような要因で「そろそろ」の用法が派生していったのかを考察したい。

4. 用法派生の要因

3節では、近世を通じて「そろそろ」の用法が派生していく様子を見てきた。ここでは、用法が派生する要因について考察したい。変化の進展を表す用法や、事態発生が近いことを表す用法は、どのような要因で派生したと考えられるのだろうか。ここで注目したいのは、変化の進展を表すものは、動きの様態を表すものとも連続した側面があり、また事態発生が近いことを表すものとも連続した側面があると捉えられることである。

まず、変化という概念について整理しておきたい。変化は、時間という概念がないと成り立たない概念である。 t_1 、 t_2 、 t_3 …という時間の流れに応じて、Aという対象が A_1 、 A_2 、 A_3 …という異なった現れをしたとき、人はAが変化したとみなす。つまり、変化は時間の経過 t_1 、 t_2 、 t_3 …とそれに伴う現れ A_1 、 A_2 、 A_3 …の2つが関わっている。

ここでいう現れとは我々の前に現れる事態である。事態は、それがどのような状態であるかということと、どれくらいの量であるかによって構成されると考えられるから、^(注6)時間の経過に応じた異なった現れを問題にする変化においても状態や量が関わるということになる。そして、変化の進展を表す副詞は、そのうちの量的側面を表すと考えられる。たとえば、(9a)であげた「そろそろふうきになり」の場合、状態を「ふうきに」が担い、変化の度合いという量を「そろそろ」が担うといえるだろう。

これらのことをふまえて、動きの状態を表すものと変化の進展を表すものとの連続性について考えたい。これまで見てきたとおり、「そろそろ」が表す動きの状態は、静かな様子という音から見た状態であるとともに、ゆるやかであるという動きの速さから見た状態でもあった。それらのうち、速さはもともと時間的な量を示す概念である。したがって、動きの速さは、変化の速さを表すものにずれやすいと考えられる。

ゆっくりとした様子を動きの状態として捉えるか、それを変化の進展として捉えるかは、時間に応じた現れを均質的なものとして見るか、異なったものとして見るかによる。時間に応じた現れを均質的なものとして見れば、それは単なる持続であり、異なったものとして見れば、変化であるということになるだろう。このように、時間に応じた現れを異なったものとして見ることにより、^(注7)動きの速さという状態から量的側面が顕在化するようになったものが、変化の進展を表す「そろそろ」といえる。

変化の進展を表わすものが、他のタイプの副詞と連続的であるという指摘は、仁田(2002)にもある。仁田(2002)は、時間関係の副詞と分類するものうち、事態の進展を表す副詞について次のように述べる。

〈進展状態型〉は、時間の展開に従って、事態が進展していき、その進展とともに、事態の内実である変化が漸次的に拡大していくことを表しているものである。変化のあり方という点において、状態の副詞的でもある。また、変化の程度性の拡大という点において、程度量の副詞的でもある。(仁田 2002: 241 下線は筆者による)

進展状態型とされているものは、「次第に」「だんだん」「徐々に」などであり、本稿で変化の進展を表すと述べてきたものと同様のタイプの副詞と考えられる。^(注8)

では、事態発生が近いことを表わす用法はどのようにして派生したと考えられるだろうか。こちらは、変化の進展に時間との関わりがあるという点に注目

することによって、その連続性を捉えることができると思われる。

変化の進展を表すものと事態発生が近いことを表すものとの連続性を考えると次のようになる。たとえば、(9b) であげた「なにか墨にてそめたる花の事なれば、水をかくるとそろへしろくなる。」は、白くない状態から白い状態へと少しずつ変化していくことを表している。これは見方を変えれば、白い状態になる時が近づいているとも捉えられる。このように、時間的側面への注目点の変化の過程から変化達成時への近さにずれれば、事態発生が近いことを表すようになると考えられる。この意味で、変化の進展を表す「そろそろ」は事態の発生が近いことを意味するものと連続的であるといえる。

また、あらためて事態の発生について考えてみると、事態の発生とは事態が生じていない状態から事態が生じた状態への移行という意味で変化といえる。つまり、状態変化が終了限界に達することだけでなく、動作の開始についても動作が開始されていない状態から開始された状態になるという点で変化と見なせるということである。^(註9)したがって、「そろそろ」に事態発生が近いということを表す用法が派生した時点で、変化の達成、動作の開始の区別なく、事態発生
の近さを表せるようになったと思われる。

以上のように、変化の進展を表すものは、事態発生が近いことを表すものと連続した側面がある。「そろそろ」は、時間の見方の転換によって（時間的側面の注目点がずれることによって）、事態を時間的に位置づける用法が派生したのではないかと考えられる。

ここで、このような変化が「そろそろ」に限ったことではないということにもふれておきたい。現代語において「そろそろ」と似たものとして、「ぼつぼつ」があげられる。現代語の共時的分析をしている森田（1989）は、類義語として「ぼつぼつ出掛けましょうか」のように、「まもなくその時期になる少し手前」の意味の「ぼつぼつ」をあげている。さらに、「まだぼつぼつだけれど、応募者は順調に増えている」のように、「ぼつぼつ」は「すでにその事が始まって少しずつではあるが進展しているさま」にも使われるが、「そろそろ」にはこの用法はないと指摘している。このように、「ぼつぼつ」はある種の進展を表すということと、事態の発生時が近いことの両方を表しうるという点で注目される。

「ぼつぼつ」は「そろそろ」と同じく擬声語・擬態語出自と考えられ、「そろそろ」と意味用法がかなり似ている一方で、さらに広く用いられており、「そろそろ」の変化を考える上でも参考になる。あらためてくわしい調査を行わなけ

ればならないが、「ぼつぼつ」も「そろそろ」と似た変化が起きていると思われる。「ぼつぼつ」の場合は、近世においては事態の発生が近いことを表す用法はなく、近代以降にそのような用法が生じるようである。^(注10)

また、変化の進展から事態の発生と関わるものへ意味機能が変化したと考えられる他の事例として、「やうやう」の変化が考えられる。「やうやう」（現代語では「ようやく」「やっと」）は事態の達成を表すものへの変化であり、その点で「そろそろ」と異なる。だが、変化の進展から事態の発生を時間的に位置づけるものへ意味機能が変化したという点では「そろそろ」と似ているといえるだろう。^(注11)

これらの事例も考えあわせると、変化の進展から事態の発生を時間的に位置づけるものへの意味機能の変化は、ありうる言語変化といえるのではないかと考えられる。

5. 近代以降の「そろそろ」

前節までで「そろそろ」の用法が派生していくことと、その要因について考察してきた。本節では「そろそろ」の用法の勢力交替について述べたい。

事態発生が近いことを表す用法は、近代以降勢力を増していく。近世期には、事態の成立時が近いことを表すものに意志や勧誘の表現との共起が見られたが、明治・大正期では、他に当為表現などと共起した例も見られる。

- (14) a. 「どうだろう。もうそろそろ帰っても好くはあるまいか」（森鷗外『青年』）
- b. 「そろそろ出掛けましょうか」と妻君が書齋の開き戸を明けて顔を出す。（夏目漱石『我輩は猫である』）
- c. 今日のうちにも何か起るか、それとも明日か、こんな事を考えて、自分もそろそろ逃支度をして置かねば、と思った。（志賀直哉『小僧の神様・城の崎にて』）
- d. （もう可い時分じゃ、又私も余り遅うなつては道が困るで、そろそろ青を引出して支度して置こうと思うてよ）（泉鏡花『歌行燈・高野聖』）

また、近世期において2例しか見えなかった名詞述語の例もだいぶ増えてくる。ただし、文脈的に事態の推移が読みとられるか、「時節」「時分」など、ある出来事が起きる時間であることを表す名詞でなければならぬという点は変わらない。

- (15) a. 「もう、そろそろ蛭が出る時分ですな」と云った。（夏目漱石『それか

ら』)

- b. 宗助は腕組をしながら、もうそろそろ火事の半鐘が鳴り出す時節だと思った。(夏目漱石『門』)
- c. 三好だって面白くなかろうし、それにもうそろそろ藤代さんの来る時分だ、と思うと(里見弴『多情仏心』)

このように、近代では事態の発生が近いことを表す「そろそろ」が定着しているといつてよいだろう。

その一方で、明治・大正期においては、現代語にくらべて「そろそろ」が動きの様態や変化の進展を表す用例も多く見られることが注意される。次の例は動きの様態を表す例である。

- (16) a. 吾輩は仕方がないから、そろそろ歩き出した。(夏目漱石『我輩は猫である』)
- b. 代助は世間話の体にして、平岡夫婦の経歴をそろそろ話し始めた。(夏目漱石『それから』)

次の例は、変化の進展を表す例である。たとえば、(17b)では、少しずつ評判が悪くなったという過去の出来事を述べている場面であり、これから評判が悪くなるだろうという判断を表しているわけではない。

- (17) a. 洗物をさせるにも、雑巾掛をさせるにも、湯を涌かして使わせるのに、梅の手がそろそろ荒れて来る。(森鷗外『雁』)
- b. とにかく重右衛門はこの頃からそろそろ評判が悪くなったので、その祖父の孫に対する愛を知っている人は、他村の者までも、重右衛門の最後の必ず好くないという事を私語き合ったのである。(田山花袋『蒲団・重右衛門の最後』)
- c. 空から射す日の光はそろそろと熱度を増して、土はそれを幾らでも吸うて止まぬ。(長塚節『土』)

現代語では、動きの様態を表す「そろそろ」が用いられる場合、修飾する動詞は意志動詞であり、しかも音を伴うような動作動詞が多い。それに対し、「荒れる」「なる」「増す」のような状態の変化を表す動詞にも使われている。

現代語ではこれらの用法は中心的ではない。とくに、変化の進展を表すものは衰退したといえる。現代語において、事態の発生が近いことを表すものが主たる用法となっていることは、新潮文庫の100冊の調査からうかがえる。戦後生まれ作家の作品では、動きの様態を修飾するものが3例しかないのに対して、事態の発生が近いことを表すものが55例であり、後者が大部分をしめている。

このように、近代以降、事態の発生が近いことを表すものが勢力を増し、現代語における主要な用法となったと考えられる。

また、「と」の有無に関して、現代語においては、動きの様態を表す場合はほとんど「と」を伴うということが注意される。一方、事態の発生が近いことを表すものは、「と」が脱落した形でしか使われない。動きの様態を表す場合には「と」を伴わないと非文になってしまう、とまではいえないが、「と」の有無によって用法がすみわけられている状況にかなり近いということはいえるだろう。「と」の脱落した「そろそろ」が事態の発生が近いことを表すものとして勢力を増した結果、それと区別するために、動きの様態を表す場合は「そろそろと」の形で用いられるようになったのではないかと考えられる。^(注12)

6. まとめ

もともとは事態の様態的な側面を表す副詞であった「そろそろ」は、現代においては「と」の脱落した形で、事態の発生が時間的に近いことを表す副詞として用いられることが多い。その歴史的变化をまとめると次のようになる。

擬声語・擬態語である「そろそろ」は、静かでゆっくりとした動きの様態を表す副詞だったが、近世には変化の進展も表すようになった（量的側面の顕在化）。そして、時間的側面の注目が変化の進展の過程的側面から変化達成時へと移ることによって、事態発生が近いことを表す用法が派生した（時間の見方の転換）。近代以降、事態発生が近いことを表す用法は勢力を伸ばし、現代語でもっとも用いられる用法になっている。また、現代語においては、動きの様態を表す場合には「と」を伴うことが多く、事態発生が近いことを表す場合は「と」を伴うことはないというように、「と」の有無で用法がすみわけられている状況にかなり近い。

このような「そろそろ」の歴史的变化は、副詞の語史研究としてだけではなく、擬声語・擬態語の歴史的研究や、言語変化にどのようなパターンがありうるのかといった点からも注目できると思われる。まず、3節の終わりでも述べたように、「そろそろ」の歴史的变化は、擬声語・擬態語らしさの消失とともに意味機能が変化した事例として位置づけることができる。また、もともと様態という属性を表していたものが、事態を時間的に位置づけるものへと変化したという点で、言語変化のあり方という面でも興味深い事例といえるのではないだろうか。

なお、本稿では「そろそろ」の諸用法をすべて副詞と呼んだが、川端、工藤

のように、いわゆる情態副詞（一部のものを除く）を活用しない形容詞（不完全形容詞）として範疇化する立場に立てば、本稿で動きの様態を表すと述べてきたものは形容詞になる。この立場から「そろそろ」の歴史的变化を述べるなら、「そろそろ」は属性的な意味をもった形容詞から、意味が抽象化して時間量を表す副詞らしい副詞へ変化したということになるだろう。

(注1) 例文のあとに出典を示す。作品名の後に数字が書かれている場合は、その作品の成立年代を指している。出典が書かれていない場合は作例である。なお、用例の下線は筆者が付け加えた。

(注2) 「そろりそろりと」も似たような意味のものとして用いられている。

是はいるまのながしでござる、あたりの在所へ少用有て参る、そろり
――と参らふと存る（虎明本狂言 1642、入間川）

また、『日葡辞書』では、「そろりそろりと」がゆるりと、少しずつ、のような意味とされており、「そろりと」「そろそろと」も同じ意味であることが記述されている。本稿は「そろそろ」の変遷について考察するので、「そろりと」や「そろりそろりと」については基本的にふれないこととする。

(注3) 表記の面では、易林本節用集において「漸」に「ヤフヤク」と読みが記され、そのすぐ下の「徐」に「同」とあり、書言字考節用集にも同様にあるが（「ヤワヤク」となっているが「ヤウヤク」のことと思われる）、書言字考節用集では、それに加えて「徐々」に「ソロ――」と読みが記されていることも注目される。

(注4) 資料の量的な問題上、江戸語に関して見ていく。なお、上方においても、次のような例が見られる。

才 もふゆふぐれじや。そろ――しやばへ出ようか。（色深狭睡夢 1826、巻下）

ふところ手にて、そろ――ゆこかと大勢あとさきへ大手のしるしの付た丁ちんにて取まき、（落断千里藪 1846、巻2）

(注5) 別の言い方をすれば、表される事態が時間的な限定性をもつ事態でなければならない、ということになる。「そろそろ」そのものについてではなく、同じようなタイプの副詞についてであるが、表わされる事態が時間の経過とともに推移しうる事態でなければならないという指摘は、先行研究にもある（仁田2002：39-40、255-256および日本記述文法研究会（編）2007：68-71など）。

(注6) 川端（1983：12-16）参照。ここでいう量とは程度も含む広義の量である。以下に述べる様態と量の関係についての理解も川端（1983）による。

(注7) 川端（1964b）に「同質的に持続するものなかに質の程度的な変化が生じ、それが時の流を顕勢的に意識させもする」（川端1964b：39）という指摘がある。工藤（1985）においても「時の認識は、おそらく物事の変化に気づいたときに始まるのだろう」（工藤1985：50）という指摘がなされている。なお、つきつめて考えれば、変化の認識が先なのか、時間の認識が先なのかということが問題になるが、ここではふれない。

(注8) 仁田（2002）では、むすびつく動詞の種類および、動詞の文法カテゴリとの対応をふまえて副詞の分類がなされ、「結果の副詞」「様態の副詞」「程度量の副詞」「時

間関係の副詞」「頻度の副詞」の五つにわけられている。よく知られている「情態副詞」「程度副詞」「陳述副詞」という三分類との対応を示すと、「情態副詞」「程度副詞」（およびそれに相当する働きをもつ文の成分）を、動詞の文法カテゴリとの対応をふまえて、改めて体系化したものといえる。ただし、仁田（2002）では、単語としての副詞に限定せず、副詞的修飾成分を考察範囲としているので、「情態副詞」「程度副詞」と外延が一致するわけではない。たとえば、いわゆる形容詞の連用形なども含まれている。

仁田（2002）においては、時間関係の副詞は「事態存続の時間量」「時間の中における事態の進展」「起動への時間量」という三つに下位分類される。次に、語例を一部示す。

事態存続の時間量（ずっと、しばらく、少しの間、一瞬、午前中、三時間で）
時間の中における事態の進展（次第に、だんだん（と）、徐々に／年々、日ましに）

起動への時間量（すぐ、たちまち、突然、ほどなく、やがて、ようやく／まだ、もう）

なお、時間と関わる副詞を取りだして、組織化、体系化を行ったという点では、川端（1964a）（1964b）が重要である。また、工藤（1985）も、時の副詞的成分（時の名詞、時の形式名詞、時の副詞）を整理している。

- (注9) つまり、ここでいう変化は、アスペクト研究で動作動詞、変化動詞というときの変化とは異なる。変化動詞というときの変化とは終了限界を超えた場合のみをさす。ここでは開始限界と終了限界の2点のどちらも事態の発生時と見なせるということ述べている。動作の開始や終結も変化と捉えられるということは、井上（2009）にも指摘がある。

- (注10) 「ほつほつ」に関しては、「ほちほち」のように異なる語形のものも考慮にいれて検討する必要がある。また、方言による違いなども考慮に入れる必要がありそうである。たとえば、語形に方言差のあることが『日本国語大辞典』の記述から知られる。以下はそのうちの一部を示したものである。

「ほちほち」ゆっくりと時間を掛けるさまを表わす語。岡山県児島郡「ほちほちして来ねー（ゆっくりしておいで）」

「ほちほち」徐々に。ゆっくり。ほつほつ。栃木県「ほちほち仕事でも始めるか」

「ほつほつ」ほつほつ。そろそろ。だんだん。新潟県佐渡 鹿児島県 ◇ほつ
ついほつつい 鹿児島県

- (注11) 「やうやう」の語史については、濱田（1953）がある。濱田（1953）は、「動作或は状態の変化が緩慢に行われる意味」を表していた「やうやう」が、どのようにして現代語の意味になったのかを考察したものである。濱田では、「動作或は状態の変化が緩慢」であることをもどかしく思う、という意味が文脈的に生じ、それが「やうやう」という語自体の意味になったとされている。

「やうやう」と「そろそろ」の違いは、「やうやう」は変化が達成されたという点が注目され、「そろそろ」は変化が達成されそうであるという点が注目されることによって生じたものと思われる。なお、中古語の「やうやう」に関しては、田和（2009）によって通説とは異なる解釈も提出されている。

- (注12) 事態の発生が近いことを表すものが勢力を増し、現代語における主要な用法と

なった一方で、様態を表す用法が完全に衰退しなかった背景として、「そーっと」「そろりと」「そろりそろりと」などの存在が考えられる。擬声語・擬態語が様態的な副詞として用いられる型として、「Aーット」「ABリト」「ABABト」「ABリABリト」など、語尾の「と」を伴うものがあり、その体系の中で意味用法が保たれるということは十分ありうる。

変化の進展を表すものが見られなくなることに關しては、他の副詞との関係も考慮する必要があるかもしれない。田和（2008）によれば、近世中期以降「だんだん」という副詞が変化の進展を表すようになり、鳴海（2007）によれば、「次第に」は近世以降変化の進展を表すようになったという。また、日本国語大辞典を参考にすると、近代以降、「徐々に」がよく使われるようになったようである。これらの存在も「そろそろ」の変化と関わっている可能性がある。とくに「徐々に」は表記の面でも「そろそろ」と関係があり、改めて考察する必要があると思われる。他の副詞との張り合い関係については今後の課題としたい。

【調査資料および使用テキスト】

中世：北野克『名語記』勉誠社／中田祝夫『古本節用集六種研究並びに総合索引』風間書房／岡見正雄・大塚光信（編）『抄物資料集成』清文堂／大塚光信（編）『続抄物資料集成』清文堂／中田祝夫（編）『中華若木詩抄』勉誠社文庫／坂詰力治『論語抄の国語学的研究 影印篇』武蔵野書院／来田隆『句双紙抄総索引』清文堂／来田隆『湯山聯句抄本文と総索引』清文堂／来田隆『中興禪林風月集抄総索引』清文堂／J. ロドリゲス（著）・土井忠生（訳）『日本大文典』三省堂／近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ（編）『天草版平家物語語彙用例総索引』勉誠出版／大塚光信・来田隆（編）『エソポのハプラス本文と総索引』清文堂出版／土井忠生・森田武・長南実（編訳）『邦訳日葡辞書』岩波書店／池田廣司・北原保雄『大蔵虎明本狂言集の研究本文編 上中下』表現社
近世：中田祝夫・小林祥次郎『書言字考節用集研究並びに索引』風間書房／武藤禎夫・岡雅彦（編）『断本大系』東京堂出版（第1巻～第16巻のみ）／『日本古典文学大系』岩波書店所収の西鶴浮世草子、近松浄瑠璃、浄瑠璃、歌舞伎脚本、黄表紙、洒落本、滑稽本、人情本／御撰勸進帳…『新日本古典文学大系』岩波書店／甲斐新話、古契三姐、繁千話、酩酊氣質、浮世床…『日本古典文学全集』小学館／新月花余情、聖遊郭、陽台遺編、姪閨秘言、月花余情、郭中奇譚、短華藥葉、粹のすじ書、北華通情、十界和尚話、南遊記、当世粹の曙、色深狭睡夢、北川蜆殻…『洒落本大成』中央公論社／前田勇「穴さがし心の内そと」『近代語研究4』武蔵野書院／興津要校注『七偏人』講談社
近代以降：『CD-ROM 版 明治の文豪』新潮社／『CD-ROM 版 大正の文豪』新潮社／『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』新潮社（翻訳作品を除く）
なお、用例検索にあたり、国文学研究資料館の本文データベース検索システムを利用させていただいた。

【参考文献】

井上 優（2009）「「動作」と「変化」をめぐる」『国語と国文学』86-11
川瀬 卓（2006）「象徴詞の「と」脱落についての通時的考察」『語文研究』100・101
川端善明（1964a）「時の副詞（上）」『国語国文』33-11
川端善明（1964b）「時の副詞（下）」『国語国文』33-12

- 川端善明 (1983) 「副詞の条件」渡辺実 (編) 『副用語の研究』明治書院
- 金水敏 (2000) 「時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子 『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』岩波書店
- 工藤浩 (1985) 「日本語の文の時間表現」『言語生活』403
- 工藤浩 (2010) 「「情態副詞」の設定と「存在詞」の存立」齊藤倫明・大木一夫 (編) 『山田文法の現代的意義』ひつじ書房
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』ひつじ書房
- 壽岳章子 (1956) 「擬声語の変化」『西京大学学術報告 人文』7 (壽岳章子 (1983) 『室町時代語の表現』清文堂に所収)
- 田和真紀子 (2008) 「「ダンダン」の意味・機能の史的変遷——〈累積〉から〈進展〉へ——」『都大論究』45
- 田和真紀子 (2009) 「副詞「やうやう」と共起する「Vユク」の意味」『日本語学会2009年度春季大会予稿集』
- 鳴海伸一 (2007) 「「次第」の国語化と時間副詞化」『訓点語と訓点資料』119
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (編) (2007) 『現代日本語文法 3』くろしお出版
- 濱田敦 (1953) 「「やうやう」から「やと」へ——語の意味の変化の一例として」『人文研究』4-6 (濱田敦・井手至・塚原鉄雄 (2003) 『国語副詞の史的研究 増補版』新典社に所収)
- 飛田良文・浅田秀子 (2002) 『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版
- 宮城信 (2005) 「進展的事態の構文と意味——構成的な意味に注目して——」『筑波日本語研究』10
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 山口仲美 (編) (2003) 『暮らしのことは 擬音・擬態語辞典』講談社

(かわせ すぐる・本学大学院博士後期課程)